

希望の風

三浦喜代子

十代 聖書から教会へ

十代のだ真ん中、十五歳こそ私の黄金の年、生涯最良の年になった。六〇年を経た今、ますますその感を深くしている。輝かしくもイエス・キリストのみ救いに与かったからだ。突然その日が来たわけではなく、たどり着くまでには忘れられない多少の道のりがあった。あるころ、妹二人の話がなぜか心に引つかかった。私の知らない言葉が出てきたせいである。

「日曜学校で……」

「日曜学校が……」と言うのである。

日曜学校？学校といえば、一つしか知らない。日曜日に学校へ行くとは聞いていない。おかしいではないか。どうやらふつうの学校とはちがうところらしい。胸がざわざわと音を立てた。妹ごときが私の知らない場所に入りに出ているのだ。姉として許せなかった。その頃私は四人姉妹の長姉を笠に着てひどく威圧的な支配者だったらしい。面子もあって率直に聞けない。何気ないふりをしながらも神経を尖らせていた。

妹の手に真つ赤な小さい本を見たとき、姉としてのプライドは消えていた。

「なによ、それ」

「日曜学校でもらったの」

「ふーん」

見たこともない色と形に心奪われてしまった。おもちゃみたい、しかも真つ赤だ。何の本だろう、何が書いてあるのだろう。ほしい、ほしいなあ！

心がうずいてしかたがない。

「もらつてきてあげようか。だれにでもくれるよ」

「ほしいでしょう、それとも姉ちゃん、自分で、もらいに行けば？くれるよ、きっと」

妹たちに心の内を見透かされたようで、怒りがこみ上げてきた。

「そんなもの、いるもんか。ほしくなんかないっ」

強がりを言つて妹たちをにらんだが、それ以来、赤い小さな本が忘れられなくなった。後に知ったことだが、新約聖書の分冊で、ヨハネの福音書だった。

中学三年生になって、高校受験が不安で仕方がなかった。加えて青春前期特有の情緒の高潮を浴びていた。魂の飢えが始まっていたのだ。

「姉ちゃんも教会に行つてみたら。日曜学校でなくて、大人の礼拝がいいよ」

妹の一声に、この時ばかりは抵抗しなかった。実に不思議だ。私は初めて、教会なるところに、大人の礼拝に、たった一人で出かけていった。その道がなつかしい！

二十代 嵐の海へ

十五歳でイエス・キリストの救いに預かり、順調に教会生活が続く一方で、私の人生の小舟は否応なしに世間という大海原へも進んでいった。ところが、大海は凧ばかりではなかった。

結婚するや、待ちかまえていたように大嵐に見舞われた。嵐は主から来たものにちがいはなかった。私にはそれがよくわかった。暴風雨は主の悲しみの吐息であり、嘆きの叫びであった。そう思う理由があった。結婚は主のみ心ではなかったのだ。もちろん愛と信頼を最優先させたつもりであったが、利己的な計算もあった。彼はきつと手腕を發揮して我が家の家業をもり立ててくれると値踏みし、父母と合意で婿養子として迎えた。

夫は私の信仰に反対はしなかったが、神様への特別な関心も示さなかった。そのときから私は神様に対して大きな引け目を感じるようになった。後ろめたさがいつもついて回った。負い目の帳じりを少しでも合わせたくて、私は教会生活にますます没頭した。信仰の行いで罪の代価を支払おうとしていたのだ。もちろん当時は気づくはずもない。

当然、夫とは行き違ふことが多くなつた。日曜日の過ごし方から冠婚葬祭への対応、金銭感覚、倫理道徳などあらゆる事柄で食い違つた。私自身がまず人格的に未成熟だった。

受容や寛容にかけていた。日曜礼拝に行けないと一週間中が灰色だった。寂しくて悲しくて忍び泣いた。おそらくいつも憂鬱な顔をしていたのだろう。これでは夫もたまらなかつたろう。外へ興を求めるようになったのは無理もなかったのだ。

初めての子どもの出産が近づいていた。二六歳の時であった。

父も母も妹たちも、親戚も友人も知人も、みんなが喜んでその日を待っていてくれた。母といっしょに多すぎるくらいのおむつを作った。肌着も縫った。

予定日一週間前の明け方、突然大出血をした。血の海の中から産院へ担ぎ込まれたとき、すでに胎児の心音はなかった。妊娠中毒症による胎盤早期剥離が起ったのだ。意識が薄れていくなかで、急ぎ帝王切開手術が行われた。

・ ・ ・ こんなこと、うそに決まっている。いやな夢を見ているだけだ ・ ・ ・

無理にそう思いこもうとしても現実はその姿をむき出しにしてくる。私のベッドにはいつになっても赤ちゃんはこなかった。

・ ・ ・ どうしてですか、なぜ、わたしだけ、赤ちゃんを抱けないのですか ・ ・ ・

その後しばらく夫はわたしの嘆きに添ってくれたが、まもなく以前にもまして体も心も外を向いていった。夫婦の仲はもとより父母との関係も蝕まれ、崩れていった。

三十代、私の小舟はさらに激しい風雨にたたかれることになった。

初めての子を死産で失った心身の痛手は大きかった。死んでいった我が子に申し訳なく、おめおめと生きている自分が疎ましく、罪の思いにさいなまれた。だが神様は私の心身を日に日にいやし、日常のただ中へ連れ出した。私は再び家業に精を出し、教会生活にも励んだ。

祈り方が変わり、新しい祈りが加わった。

・・・もしもわたしをもう一度母にしてくださいますなら、その子を主におささげします。主の器として用いられるように導き育てます・・・

私は天を仰いでひたすら祈った。祈りに答えるかのように、元気な娘二人を年子で授けてくださった。私は神様からの預かりものと確信して心して育てた。

神様と関係が熱く深くなり、子育てに没頭しているうちに、夫は私から離れていった。私の知らない世界を持つているらしかった。肺腑をえぐられるような葛藤が続いたが、表沙汰にして事を荒げたくはなかった。神様がどのように決着を付けてくださるか、何年でも待つ覚悟をした。

ところが事態は思いもしない方向へ走り出した。

一九七三年八月二十九日、午前十時頃だったろうか。私が、大きな交通事故に遭った。自転車に乗って近所へ用に行き、交差点で信号が変わるのを待っていた。いつせいに車が動き出して、私も直進した。と、目の前に大きな車輪が見え、私の方に迫ってきた。大型トラックが左折しようとしていた。避けようとしたが遅かった。

左足に上肢下肢とも激しい裂傷を負った。八時間半に及ぶ手術、しかし九九・九%切断の可能性があると診断された。長女が六歳、次女が五歳であった。私は三三歳を迎えたばかりだった。

神様のお心がなんととしても理解できなかった。夫の問題で懊悩苦悩していると真ん中のこんな時期になぜ、私がさらに深手を負わなければならぬのか。

・ ・ ・ 夫が事故に遭うのならわかりませんが、どうしてわたしなのでしょうか ・ ・ ・

私は持つて行き場のない憤懣を神様にぶつけた。身動き一つできないベッドは神様との熾烈な戦場になった。

長い沈黙の中から神の声が聞こえた。聖書のみことばからであった。

『私は永遠の愛であなたを愛した、それゆえあなたに誠実を尽くし続けた』

またたく間に心の闇が裂けて、まばゆい光が差し込んできた。私はすぐにうなずいた。大急ぎで目の前の「神の愛の新船」に乗り換えた。

四十代 再出発 再々出発

神様から『永遠の愛』をいただいた私は、予測されたあらゆる危険から守られ、その後の二回の手術も乗り越え、切断の危機も脱して、予定の半分で退院できた。後遺症による多少の不自由もあつたが、歩行に著しい困難はなかつた。

ところが、夫との関係はもはや修復不可能だつた。十五年の結婚生活ははかなくも砕け散つた。三六歳の早春、七歳の長女、六歳の次女とともに再出発することになった。

早速、衣食住の強風に体当たりされた。

「家に部屋があるじゃないの。帰ってくればいい」
父母が提案してくれた。

仕事を探すにあたっては、たとえ貧しくても、清い経済で子どもたちを育てたいと願い、祈り求めた。

「これからは教会の職員として働いてください」

それまでもずっとボランティアで奉仕してきたが、教会の幼稚園で働けるようになった。それからかつきり十年、園児たちを抱きかかえ、賛美とみことばに浸りながら過ごした。もう以前のように自分の生き方に不安や疑問や後ろめたさを持つことはなくなった。すべ

ての罪とがを赦された喜びがあった。

私は満足しきっていた。十五歳の時から導いてくださった牧師は、まるで娘のように親身になって祈り支えてくださった。

十年が一日のように過ぎ去ったあるとき、再び人生の小舟は大波をかぶった。

牧師が八〇歳になり、第一線を退く時期にきていた。若い牧師家族を迎えるにあたり、役員会は幼稚園を廃園することに決めた。私は不要の者になった。

娘たちは二人とも高校生であった。大学を目指していた。途方に暮れ、詮方尽きる思いであった。私はまた神様のみ心がわからなくてうめいた。

しかし、今までになく強い太い導きの光が差し始めた。職を失った私に教会の友が勧めてくれた。「学習塾を始めなさいよ。あなたならできるよ。きっと成功するよ」

強く心が動いた。出来るかもしれないと思った。

その後の十数年は、自宅の一室を教室にしてミニ学習塾をした。卒園児や教会学校の生徒たち、地域の子どもたちであふれた。私は全力を注いだ。ここでもまた充実しきった悔いのない歳月を与えられた。経済は大いに潤された。娘たちは献身に導かれ、それぞれ神学校で学びを終え、現在まで教会に仕えている。

ところが、一九八九年五月、私は高熱と嘔吐が続き、急性脳髄膜炎と診断された。

五十代 大病、三人がそれぞれの小舟へ

一九九〇年六月、私は思いがけなく体調を崩した。風邪だろうと高を括っていたが四〇度を越える高熱が幾日も続き、ついに黄色いものを吐き、意識がもうろうとしてきた。見かねた長女が、以前交通事故でお世話になった墨東病院の救急外来に連れて行った。すぐ入院になった。急性脳髄膜炎とのことだった。不意の嵐のようだった。

二四時間昼夜を通して点滴が投与されたが数日たっても熱は下がらなかった。とうとう医師は娘二人に宣告した。

「お母さんはこのまま死ぬか、生きても脳が破壊されて廃人同様になるか、です」
娘たちは言葉もないほど大きなショックを受けて私のベッドに來たそうである。

そのころ、私は祈りの中で、この病はきつと治ると確信を与えられていたので、娘たちの顔を見るとすぐに言った。

「大丈夫、きつと治るからね。神様がそう言われたから。心配しないでいいよ」

娘たちは啞然としたが、医師の宣告は言わないでおこう、母の確信を信じようと決めたと後から聞いた。

数日後、医師たちの懸命な対応と投薬、その真ただ中に激しく働いた神の御手の力で、

しつこかった熱がうそのように下がり、命の危機を脱した。あのとき、頭の中に吹き込んだ清々しい風はいまもなお忘れることができない。

しばらく前から大学卒業後の進路を祈っていた長女が改まって言った。

「お母さん、私はアメリカのシカゴにある神学校に留学したいと思ってるの」

私は瞬きすら忘れていたであろう。開いた口もそのままであつたらう。心臓の鼓動もいつと止まったのではないだろうか。私はどこを見つめていただろうか。何も見ていなかった。一心に神様へ思いを集中した。お心を知りたかつたのだ。

ふと、心に響くものがあつた。

これは神様から出たことに違いない。それなら神様が全責任を負ってくださいなだらう。神様は娘だけでなく私にも巨大な信仰を与えてくださった。欲張りな信仰だった。

次女のほうは、姉より一足先に高校を卒業するとすぐに神学校へ進み、翌年は教会に遣わされる予定だった。

明けて一九九一年春は、我が家の三人それぞれが新しい生活をスタートした画期的な年になった。長女が成田からシカゴへ旅立った日、次女は教団から埼玉県の教会へ遣わされていった。私は御茶ノ水にある開校したばかりの聖書学院へ飛び込んでいった。もちろん、娘たちの学費のためにも、今まで以上に塾経営に全力を注いだ。

六十代 還暦のおどろき

世暦二〇〇〇年こそ私にとっては六十歳、世にいう「還暦」の年であった。この年は二十世紀最後の年であり、また千年ごとの区切りで数えてミレニアムと呼び、歴史の大きな節目として世界中が注目する華々しい年になった。なんだか自分がお祝いされているよううれしくもあった。

この年までよくぞ生きてきたものよ、いや、生かされてきたものよと実感して、しみじみと感謝した。『水の中を過ぎるときも、火の中を歩いてても』主は私を守られた。

かつて、人生わずか五十年と言われた時代があった。

村の渡しの船頭さんは／今年六十のおじいさん／の歌を思うと、私は、六十のおばあさんなのだ。おばあさん・・・おばあさん・・・、確かに孫にとっては祖母にちがいないが、いわゆるおばあさんなのかと、ギクリとした。

六十代は人生最後の活動期だとひそかに思ってきた。七十代以降は霧の彼方の世界であり実感薄く、体力気力がどれほど減退するのか想像もできない。また、健康に異変が起これないとも限らない。

思い入れの大きい六十代最初に、思いがけなくも、母校から声がかかり、長年積み上げ

てきた《あかし文章》を講ずる場を与えられ、一つの実りであろうと深く感謝した。

クラスは楽しかった。二〇名近くの学院生が受講され、ミニ自分史完成を目指して、文章作法を学びながら書いていった。毎週提出される作品を細かく添削した。それを何度もくり返しながら清書に至るのである。期間は半年。一人十篇を課した。かなりハードであったろうが皆さん懸命に励んでくださった。文集発行を目標にした。

編集からパソコン入力、印刷所搬入、製本までのいっさいを私が受け持った。クラス最後の日に、出来たての作品集を手にして喜び合い、感謝会をした。こうして二〇〇一年に『学院と私』、二年に『一会永遠』、四年には『いこいの泉』が誕生した。これこそ手のひらに乗せて喜べるうれしい実であった。

実を楽ししみ味わっているさなかに、乳がんが見つかった。

とつぜん足もとの地が口を開け、悲鳴を上げる暇もなく、底なしの穴にどこまでも落ちていくようであった。当時、私の思いの中ではガンは死と直結していた。ところが不覚にもまだ死の覚悟はできていなかった。

お決まりの治療と格闘しながら一年一年が過ぎたが、今のところ死は立ち止まっているようだ。それを横目で見ながら、残されている日々、の充実を努めている。

『自分の日を正しく数えることを教えてください』 詩篇九〇篇一二節

古稀を迎えて 日を正しく数える

自分が古稀だと知ってだれでもそう思うだろう、とても信じられないと。

古稀とは七十、七十歳のことだ。それは古代稀なる老年の意味だそう。もちろんこの語句が広まった頃は、「人生わずか五十年」の時代だろう。今は考えられないほど寿命が延びている。だから、古稀といえども、たかが古稀と一蹴すればいいと思う。

現代の老人年齢は実年齢から十五歳を引いたくらいと思つた方がいいと聞いたことがある。その説によればさし詰め私は今、五五歳ということになる。まさかそこまで豪語できない自分を自覚するが。

振り返ると、還暦の時も、同じような驚きを覚え、感慨を持つた。でも今から思うと十年前のなんと懐かしいことよ。いとしいことよ。花の六十歳と叫びたいくらいに。

ところがもう一つ驚いたことは、古稀に対して世間様の反応は冷やややかなのだ。六十も七十も、それが何？ 調べてくらしいにしか思っていないらしい。たしかに、百歳さえも珍しい時代なのだ。

六四歳の時、乳ガンが発覚して手術した。そのとき、以前から潜在するC型肝炎が急に目覚めたように暴れ出した。すぐ内科へ回され、肝臓の権威と称される名医に紹介された。

医師はインターフェロンによる治療を始めるように、それも完治するからと勧められた。半強制的だった。医師の良心の発露でもあったろう。ところが私は考えるところがあつて断固拒否した。医師は親切にも七十歳以上ではできないんですよ、今がチャンスですとのたまわり、拾える命をむざむざ捨てるんですかとまで迫られた。

七十歳とはある種の治療には最後の砦ともなる高齢なのか。

聖書は、『私たちの齢は七十年、健やかであつても八十年。それゆえ自分の日を正しく数えることを教えてください』（詩篇九十篇一〇節）と忠告する。

聖書も古典だが、人生わずか五十年とはいわない。七十年という。さらに、健やかであつても八十年という。七十から八十を問題にしていると思える。と言うことは、この十年をよくよく注視せよ、正しく数えつつ、大切に生きよと言つておられるように思える。では、正しく数えるとはどういうことだろう。

古稀のこの年、積年の願いであつた声楽を始めた。七十の手習いである。プロの指導を受けて少しでもましな賛美を献げたいと願つてのことである。

娘や孫たちに笑われながらもめげずに練習を重ねている。

『年老いているということは、もし人が創めるといふことの真の意義を忘れていなければ、すばらしいことである』 マルティン・ブーバー

傘寿（八十路）への上り坂

私が生まれたのは、日本がハワイの真珠湾を奇襲攻撃したその前年の、昭和十五年（一九四〇年）七月五日である。父と母の長女として、現在も住み続けている東京都墨田区（当時は東京府向島区）に誕生した。

まもなく移転した。中央区銀座東二丁目何がしと戸籍にもある。戦前は木挽町と言って、歌舞伎座の裏あたりである。父の会社の社宅だった。そこで三つ違いになる妹が生まれた。

戦争が激しくなったころ、父は徴用工として千葉県船橋市の戦闘機を製造する日本建鐵という会社へ動員され、私たちは社宅に入った。

そこで終戦を迎えた。一九四五年八月一五日、五歳になったばかりであった。社員は即日全員解雇、仕事も住まいもなくなった。

家族四人は、母の里、灯台で有名な犬吠埼の近く、千葉県銚子市外川町という漁村へ疎開した。父は、船主である母の実家の兄の世話で、にわか漁師になって働いた。そこでもう一人の妹が生まれた。

幼い私は両親の苦勞など知るはずもなく、大勢のいとこたちと海で遊び、新鮮な魚貝をふんだんに食べながら四年間を過ごした。野菜やお米には窮したらしいが。

やがて、父のかつての会社が再開したのを機に、私たち家族は再び東京に戻ってきて、現在に至っている。そうしてまもなく七〇年が経つ。私は今、傘寿への坂を上っているところである。振り返ると気の遠くなるような長い道のりだった。その一方、稲妻のように一瞬の出来事のようにも思える。おかつぱ頭のわたし、三つ編み姿の私がすぐ目の前に見える。

五十代に入って子どもたちがそれぞれの道を歩み出したところから今日まで約三〇年、私は「あかし文章」の一本道をひた走ってきた。少しでも読者に伝わる文章を目指して、日本クリスチャン・ペンクラブに入り、聖書の学び舎に籍を置き、文章修行に励んだ。若い日にイエス・キリストの愛に捕えられ、救われ、以後、どんな嵐の日にも見離さなかった神の愛を熱く書き綴りたかったのだ。

神さまも苦笑しながら応援してくださったのだろう、思っても見なかった使命感と賜物を惜しみなく与え、無から有を生み出すように、何冊かの本を執筆、出版できた。今は敬愛する書き友たちと苦楽をともにしながら、あかしの文字を刻んでいる。なんとという恵み、何という喜びであろう。

見上げれば傘寿坂の真上には薄紫の雲がたなびき、弱ってきた私の足腰にエールを送ってくる。はやく頂上に立って涼やかな『希望の風』に吹かれない。

愛唱聖句

*エレミヤ書三二章三節 新改訳第三版

永遠の愛を持ってわたしはあなたを愛した。それゆえわたしはあなたに誠実を尽くし続けた。

*詩篇七三篇二五節 文語訳

汝のほかには我たれをか天にもたん、地には汝のほかには我が慕うものなし。

*第二コリント五章二二節 新改訳第三版

神は、罪を知らない方を罪とされました。

それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。

愛唱賛美歌

*讚美歌五二九番

ああうれし わが身も

*聖歌二二二番

つみとがを ゆるされ